

ら育児に深くかかわってきたお陰で、子育てで男にできないことはないと言えようになりまし。

よくうちの子は母親でないと泣いてしまう、父親に預けられないから買い物も大変と言う人がいます。それは普段から父親が育児にかかわっていないからです。解決策は、1〜2時間父親に預けるのではなく、思いきって父と子で1泊旅行に行かせることです。子どもが小さい頃、私は北海道でも九州でも、地方講演にも子連れで行きました。大抵の講演会は保育付きなので問題なく仕事ができます。子どもは母親以外に頼れる相手がいないとすごく懐きますし、見知らぬ土地だと親子の団結力も高まります。

家族みんなで食卓を囲むには

大学の教員だからできることかもしれませんが、私は家族みんなで夕食をとる生活を中心にしています。仕事を6時くらいに終え、子どもを迎えに行き、スーパーによって買い物をして夕食を作ります。

7時過ぎ、ちょうど食事ができあがった頃にパートナーが帰宅し、家族みんなで食卓を囲みます。夕食の後片付けまでが私の役目で、1日の家事時間はだいたい2時間くらいです。日本の男性の1日の平均家事時間は20〜30分、一方、女性はその6〜9倍です。この不均衡は女性の問題というより男性の問題であるというのが私の主張です。



専業主婦家庭では女性が家事をやるのが当たり前という慣習を超え、改善すべき問題だと思えます。そもそも男性が家庭にかかわる時間がないくらい長時間働かなければならない社会では、子どもは産み育てられないと思います。そこで、仕事と家庭の両立支援から、男性を含めた働き方の見直しへ重点が移り、その議論の過程で出てきたのがワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の考え方です。

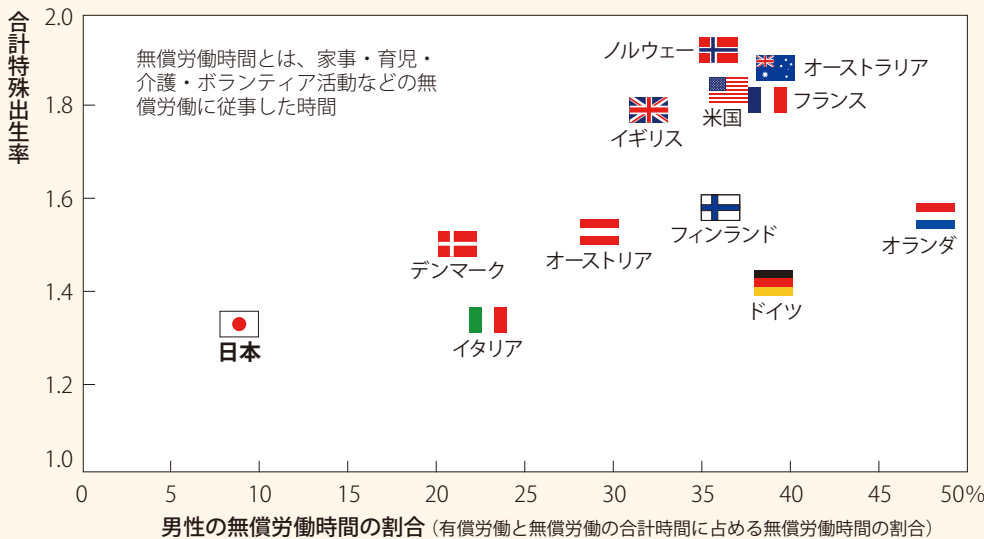
では、家族みんなで夕食を共にできる生活を実現するにはどうしたらいいか。決め手の一つは、長時間労働の改善です。講演でこの話をする時、自分の裁量で働くことのできる恵まれた職場でないと難しいと言われてしまうのですが、一人ひとりができることから始めなければ社会を変えることはできません。

労働時間を減らすためにまず最初にしなければならないのが、残業時間の把握です。誰が何時間残業しているかが正しくわからない状態では減らせません。つまり、サービス残業が横行している職場では方針が打ち出せないということです。

その上で、仕事の内容に応じて職場ごとの1か月の残業の総量を決めます。そうすると、ある特定の人に残業が偏っているなどの状況が見えてきます。特定の人に残業が偏るケースには理由がいくつかあります。一つは、その人が非常に優秀で仕事

子育てに男性の参画は欠かせない

合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に生む子どもの数）と男性の無償労働時間（家事・育児等に従事した時間）との関係を、日本と諸外国との間で比較してみると、家事・育児等に費やす時間の割合が多いほど合計特殊出生率が高くなる傾向がある。日本は先進国の中でも、どちらの割合も低い。男性の長時間労働（仕事などの有償労働時間）が改善されない限り、家事・育児などへの参画は難しい。



DATA 3 男性の無償労働時間の割合と合計特殊出生率の比較

内閣府男女共同参画局「男女共同参画社会の実現を目指して」(平成23年3月)より作成